

集団 CRAFT プログラムを導入した病的賭博の一症例

○ 丹野万樹¹⁾ 大川 直樹²⁾ 時岡かおり¹⁾

1) 心理士 2) 看護師

医療法人耕仁会 札幌太田病院

【目的】病的賭博患者の家族に対し、「コミュニティ強化と家族支援（Community Reinforcement and Family Training）」の集団プログラム（以下、集団 CRAFT）を導入し、賭博頻度の減少と、家族内のコミュニケーションの改善が見られた症例を報告する。

【方法】《①対象》病的賭博患者 A 氏（20 代男性。うつ病、病的賭博）の母。

《② A 氏の現病歴と治療経過》X-9 年、賭博開始。X-6 年頃より、うつ病で精神科通院。X-3 年、うつ症状悪化で退職した頃より、賭博の掛け金が増加し、X-2 年の再就職後からは借金開始。その後、母が金銭管理するも、インターネット上での賭博を続け、借金増大。このことからうつ症状が悪化し、X 年 12 月、依存症治療を希望して当院初診。週 1 回ペースで受診し、依存症治療プログラムの SMARPP を実施（全 12 回）。X+1 年 6 月には、病棟内内観療法を目的とした 1 週間の入院治療を行い、退院後は通院継続。

《③ 集団 CRAFT 概要》A 氏の治療と並行し、X+1 年 5 月より、母が集団 CRAFT に参加（参加者 2～5 名）。60 分のセッションを月 2 回、計 5 回実施。第 1 回目に、自我状態を測定する心理検査 TEG を実施し、第 2 回目に結果をフィードバック。同時に、①家族の動機づけと CRAFT に関する心理教育②問題行動の機能分析③効果的なコミュニケーションに関する心理教育④望ましい行動の強化に関する心理教育⑤望ましくない行動を減らすための心理教育を、参加者の状況に合わせてながら行っていた。

【結果】《①集団 CRAFT の経過》〈第 1 回目〉CRAFT に関する心理教育を行い、これまでの A 氏への関わり方が「冷たい、批判的」と受取られる」と話す。〈第 2 回目〉理性的で現実重視の判断傾向を示す A 優位型の TEG の結果を受け、「病的賭博を受け入れていなかった。壁を作った言い方になっていた」と洞察。〈第 3 回目〉効果的なコミュニケーションに関する心理教育を行ない、「言葉の重要性を感じた。繰り返し練習する」と語る。〈第 4 回目〉「相手の話をよく聞くことの大切さを実感」と語る。〈第 5 回目〉望ましい行動の強化に関する心理教育を行い、「自分がかかわらなきゃと思った」と語る。

《②母の行動変化と賭博頻度の変化》これまで、母は A 氏の賭博の話題に否定的な反応を示してきたが、集団 CRAFT 参加以降は A 氏の話一旦受け止めるようになった。また、賭博頻度の減少に対し「すごいね、えらいね」と肯定的に反応するようになった。集団 CRAFT 開始時期、A 氏は「両親が依存症を理解してくれない」「カラオケに行っても“(証拠の)写真を送って“と言うので息苦しい」と話していたが、集団 CRAFT 第 5 回目頃より「母が、賭博欲求も含め話を聞いてくれるようになった。嬉しい」と話すようになった。また同時期より、月に半分程度の賭博頻度が、2 ヶ月間に 1 回の頻度に減少した。

【考察】集団 CRAFT 参加前、母は A 氏の賭博の話題に否定的に反応していたが、賭博頻度は変化しなかった。一方、集団 CRAFT に参加し、母が A 氏の賭博の話題を一旦受け止め、肯定的に返答するようになった頃より、賭博頻度に減少がみられるようになった。

A 氏が、病棟内内観療法を行なった時期と並行して、母が集団 CRAFT に参加し始めたことにより、母の A 氏への介入方法の変容と、A 氏自身の家族観の変化が同時に奏功し、家族のコミュニケーション改善に繋がったと考えられる。それにより、A 氏は賭博欲求も正直に話し、気持ちを落ち着かせることができるようになったため、賭博頻度の減少につながったと考えられる。

【結語】依存行動の変容には、依存症者への直接的な介入に加え、CRAFT による家族介入が相乗的に効果が得られると考える。

【引用文献】スミス, J. E.・メイヤーズ, R. J. 境泉洋・原井宏明・杉山雅彦（監訳） 2012 CRAFT 依存症患者への治療動機づけ-家族と治療者のためのプログラムとマニュアル 金剛出版